スペシャルウィークとアドマイヤベガの七年後

「うそ、受かってた……」

同居人がそんな子供じみた驚嘆の声を発したのは、二十二歳の三月末、大学を卒業してすぐのことだった。ちなみに私、アドマイヤベガは院に進んだので、二十四になってもいまだ勉学は半ば。四月から無事社会人になることが確定したスペ（そういえば昔はスペシャルウィークさん、ともう少し丁寧に呼んでいたか）には先を越される格好となった。これから先は彼女の保護者面をあまりできなくなるのか、などと間近に迫った新生活に想いを馳せてもいいのだが。

「……うそ、うそ、うそ……」

……やれやれ、と思いながらスマホ画面を凝視している彼女を見遣る。耳と尻尾が忙しなく動いて、大人びた落ち着きなどありはしない。彼女らしい、といえばそうなのだが、社会に出てやっていけるのだろうか、と思わなくもない。もっとも私も自立に関してあまり人のことは言えないだろうから、こうして共に暮らしているのだろうけど。

さて、彼女が今見ているものは何であるか、それについては明白だ。直接説明などは受けていないが、朝からずっとそわそわしていたのだから察しはつく。だいたい一ヶ月前ほどに試験があったことは、流石に聞いて見ていたし。

管理栄養士の国家資格。彼女がそれを取って保育園で働きたいのだ、そう言ったのは一年半ほど前だろうか。それから長くも短くもある時間を努力してきて、確かに今日合否が出た。大それた言い方をすれば、抱えた夢が叶った瞬間が今なのだ。「うそ」としか喋れなくなるくらいは、大目に見てやらねばなるまい。

「スペ、まずは落ち着いて」

とはいえ、それなら私はある程度彼女を現実に戻す必要がある。浮かれて認められなくて、そのままでは流石に監督責任だ。もう一緒に暮らして六年弱になるからといって、まだまだ巣立ちはしそうにないし。ひょっとしたら、これからもずっと二人で生活していくのだろうし。ならばやはり、しっかり私は彼女を支えて――。

「あっ、アヤベさん笑ってる！　そうですよねそうですよね、受かったから喜んでいいんですよね！」

――うそ。

「……顔に、出ていたかしら」

「今も出てますよ！」

「気のせいよ」

「耳もそんなにぴこぴこさせて、気のせいじゃないですよー！」

「……うるさいわね」

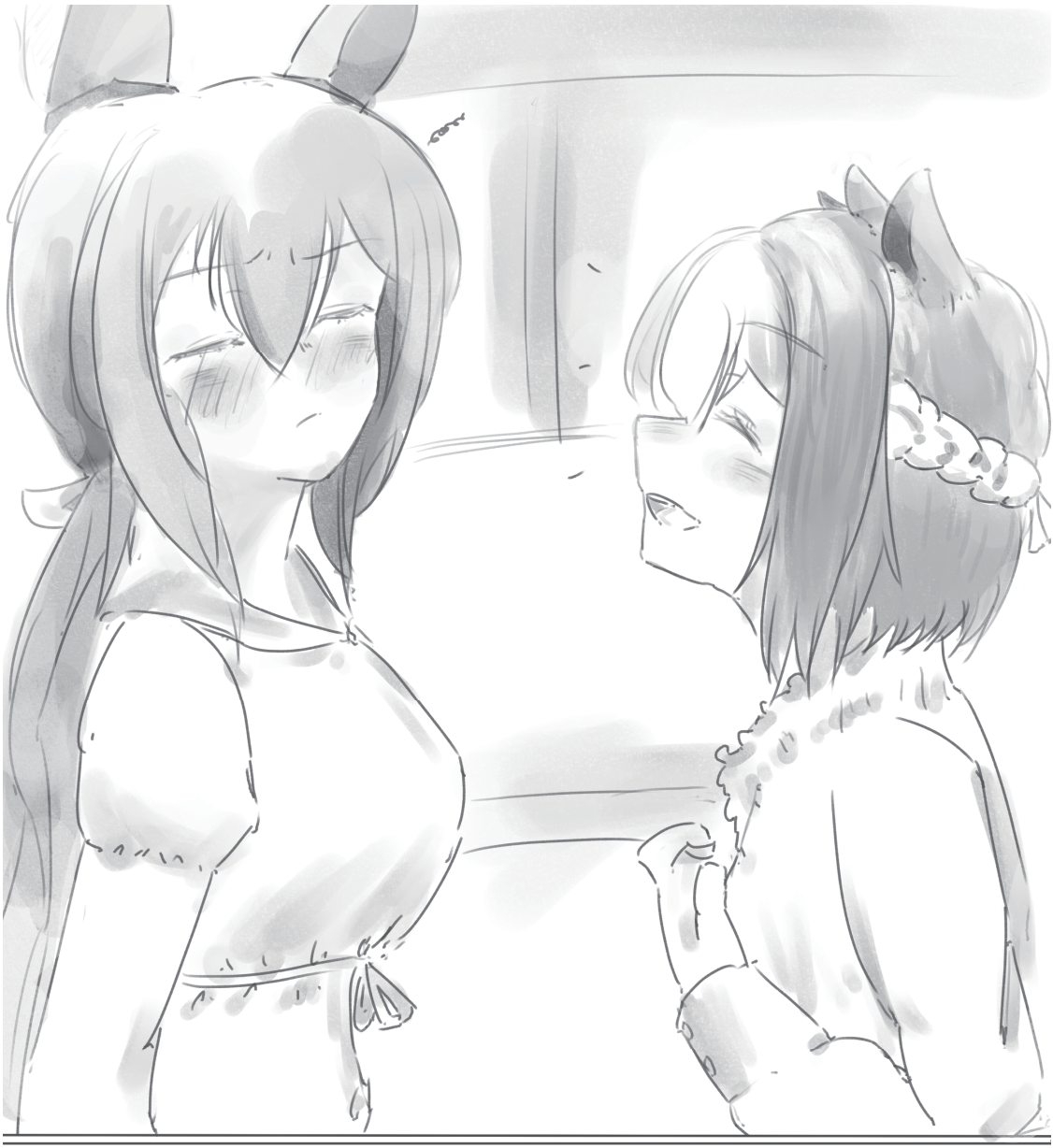
「ああ、またまたあ」

露骨に機嫌が悪いふりをしてやったのに、あなたは呆れたような笑みを浮かべて。抱きついてくるのはかわしてやったけど、そこからはすっかり手玉に取られてしまった。年上の対応を気取っていたのに、自分のことのように喜んでいるのはバレバレだったらしい。……本当に、感情を隠すのが上手くいかなくなったものだ。昔と違って、一人では立てなくなったのだ。よくない変化、だろうか。

いいや。

きっと、あなたのおかげだ。

了



アヤスペって何？と思ったみなさん!!

この本には言い出しっぺの考えたアヤスペの全てと、
この世に存在するアヤスペの大半がつまっています!!
これ一冊でアヤスペが"理解"できます!!
ゼヒ本編と共にお楽しみ下さい!! 一緒に幻覚を見ませ

わらび餅食べ子